

氏 名	長 尾 隆 志
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博甲第 3797 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	医歯学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	Prognostic Factors in Influenza-associated Encephalopathy (インフルエンザ脳症の予後に関わる因子の検討)
論文審査委員	教授 土居 弘幸 教授 山田 雅夫 准教授 吉永 治美

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

インフルエンザ脳症は、インフルエンザウイルス感染に伴う意識障害を中心とする急性の神経障害である。6 歳未満の乳幼児に多く、致死率は 30%と高い。早期集中治療導入のためインフルエンザ脳症の予後不良因子を検討した。対象は 1998/1999～2001/2002 の 4 シーズンに厚生労働省インフルエンザ脳症研究班に報告されたインフルエンザ脳症症例中 15 歳未満の予後(生存・死亡)が判明している 442 症例。患者背景・臨床症状・検査所見・治療法の点から生存例と死亡例とを比較し、多変量解析を行い、予後不良因子を解析した。生命予後不良因子として以下の項目が考えられた ($p<0.05$)。AST の上昇 (500IU/L)・血糖値の異常 ($150\text{mg/dl}\leq$)・蛋白尿または血尿・解熱剤(ジクロフェナク酸)の使用。今回の解析で明らかになったインフルエンザ脳症の予後不良因子は、臨床的に早期集中治療をおこなう指標として有用と考えられた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

インフルエンザ脳症の予後に関する研究である。本研究によって、diclofenac 投与群が有意に死亡率が高いことが明らかとなり、インフルエンザ患者に diclofenac を使用しないことが決まった重要な研究である。大学院において、そのような研究業績をあげたことは賞賛に値する。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。

審 査 概 要:

予後因子の検討に関する各因子の多重共選性についてのより深い考察を、今後の研究に期待する。また、脳症の発症と diclofenac との因果関係については、これからの研究計画に大いに期待するものとする。